

徳島子どもと教育

徳島県教職員の会
 〒771-0017徳島市川内町鶴島115
 黄金ビル 徳島労連事務所内
 TEL 088-665-6644
 FAX 088-665-2117
 携帯 090-2891-5189
 eメール dp12287892@pf.lolipop.jp
 2017年10月12日 No.221

夏のひまわり学校から学んだこと

夏のひまわり学校は、8月26～27日に美馬市の「山人の里」(旧重清北小学校)で、子ども・大人合わせて約100人で行いました。教師は部分参加も含めて13人の参加でした。校舎、体育館、運動場を丸ごと使って、2日間「ハッピーな学校にチャレンジ」しました。宿泊施設として整っているのが、夜の学校生活もOKでした。



26日 (土)	開校式	弁当	校内オリエン テーリング	飯盒炊飯 バーベ キュー	キャンプ ファイヤー	星 の 観 察
27日 (日)	小高・中学(科学) 授業 小低(工作) 幼児(獅子舞づくり)	調 理 活 動	感想文 閉校式			

子ども集団のもつ教育力

子どもたちを見ていると、異年齢の集団活動の中では、年長者は年少者によって育てられることがよく分かります。小さい子への配慮、言葉かけ等の優しさを生み出したり、年長者としての振るまいやリーダーシップが発揮されたりします。1日目の初めて出会った子どもたち、スタートの時点ではとても固くごちないですが、輪投げ・ストラックアウト・箱積み・宝さがし等々の校内オリエンテーリングで一気に雰囲気は変わります。2日目の調理活動ともなると、すっかり関係も深まり、声も上手にかけ合っていました。

一方で、異年齢班活動のもつ教育力やねらいをもった学習活動に負けないものがあるのも、見落としてはいけないと思いました。それは、休み時間などの自由時間でした。同じ年齢同士の自由なおしゃべりや自由遊びが彼らの安らぎでもあり、大切なエネルギー源にもなっていることが分かりました。

わくわくするような体験活動が新しい自分発見につながる

飯盒でご飯を炊く係になったある女の子は、お米を慎重に洗い、お父さんたちの火おこしを真剣に見ながら、自分の班の飯盒にこだわりました。美味しかったバーベキューの後で、次のひまわりも飯盒炊飯係になりたいと自信にあふれた顔で伝えてくれました。

キャンプファイヤーは初めての体験で炎に魅了された子どもたちが多かったようです。液体窒素を使った中学生や高学年の授業では、驚きの連続だったかも知れません。

2日目の調理活動では各班が食材や調味料を独自に考え取り組む「どんぶりづくり」でした。指導者側もかなりの冒険だと思いましたが、子どもたちは、ごま風味の、カレー味の、焼き肉のたれを使っただけで、また甘酢味とそれぞれのユニークなどんぶりに仕上げたのです。自分の提案が大好評の味付けになり、笑顔いっぱいになる中学生、小さい子たちも満足顔になっているのがとても印象的でした。子どもたちはいろいろな場面で感動したり自信につながる自分発見をしたりしているのがよく見え、普段の学校でもこのようなことを、少しでも追求する必要があると思いました。



子育てを学び合う最高の学校

2日間全ての活動がスムーズに進んでいったのは、裏方で機敏に動く母たち父たちがいたからと言えます。食材の準備から火おこし、ファイヤーのトーチづくりや火付け火消し役等々、学校づくりに積極的な参加がありました。夜の教育懇談会では、その父母たち一人一人が話す内容に驚き、感心もしました。お互いの子どもの様子をととてもよく観察しているのです。子どもを見る目、理解する目を学び合い、大人同士も成長し合っていると強く感じました。これぞ共同の子育てだと実感しました。

ひまわり学校での教師の大切な視点は、「子どもたちをよく観察する。学ぶべき助け合い、援助の方法、励まし合う声、共に楽しみや幸せを作る行動、チャレンジするところ、本人には気づかないところをよく観察して、自信につなげたりみんなの学びにしたりする。」ということでしたが、参加している父母に負けそうで、教えられることが多々ありました。

普段の学習ではできない実践的な交流・学びの場

「先生方の子どもたちへの接し方が強く印象に残りました。上から押さえるような言葉を一切せず、子どもたちの集団としての自然な姿を尊重し、子どもたちの持っている力で課題に取り組ませるやり方に深く感銘を受けました。あれだけ多くのやんちゃな子どもがいながら、一度も怒鳴り声を聞かなかったというのは、ある意味新鮮でした。そこから、子どもの集団は統率するものではなく、見守りながら彼らの持っている力を引き出すことが大事なのだとことを学びました。」これは、あるお父さんの感想なのですが、うれしくもありこちらが学ばされる思いでした。子どもは管理の対象ではない、ましてや調教するようによく指示に従わせることでもない。たとえ小さくても、一人の人間として尊重し、権利の主体者としてみる、共同で教材を学び合う相手であると、改めて考えさせられました。また、楽しい活動ができたらいいいというものでもなく、できるだけ自己決定することを尊重したい、と思いました。



ひまわり学校は教師にとっては実践の交流の場であり、自分の学校実践をより豊かにしていくためのヒントをつかむ場です。学習会ではなかなかつかみにくい実践的な思想や技術を学ぶことができる学校だと思います。みなさん！一緒に「ハッピーな学校にチャレンジ」してみませんか！ (投稿・小池 清)

来年度から使用する小学校道徳教科書採択で

徳島県内では「教育出版」の採択はありませんでした

「子どもと教育」219号(8/4)でお知らせしたように、徳島県教職員の会は、教育出版の小学校道徳教科書の問題点を指摘する「声明」を発表し、その「声明」を、県内の小学校、市町村教育委員会へ送付しました。

9月初めに発表された採択結果を見ると、どの採択地区、私立学校などでも、教育出版は採択されていません。

来年度は、中学校道徳教科書の採択です。現在検定中で、状況は不明ですが、中学校でも育鵬社社会科教科書を出版している「日本教育再生機構」の中心メンバーが、教育出版から道徳教科書を出すことが考えられます。県内の中学校では教育出版の教科書が多く採択されている教科もあり、小学校より採択の可能性があります。来年度も、よりいっそう、教科書内容や採択作業に注目する必要があります。

進路保障を求める四国キャラバンを実施

高校生の就職採用試験開始(9/16～)を前にし、8月28日、徳島県教職員の会などが徳島県や県教委、県経営者協会などの経済4団体に対して、高校生の修学保障・進路保障等を求める要請行動を行いました。

要請に四国各県・全教から12名が参加

要請行動に参加したのは、教職員の会・徳島労連、四国各県の教職員組合や全日本教職員組合の代表者などの12名です。県に対しては、「高校生の進路・就職保障」を実現することや「青年の働くルール確立、働く権利保障」を要請しました。また、県教委には、「高校生・青年の修学・進路の保障を求める要請書」を手渡し、その実現を要請しました。



キャラバンの成果、奨学金返還免除

県外の大学に進学して県内の企業に就職するUターン者に対する奨学金返還免除制度が徳島県でも実施されており、平成28年度では174名の希望者があり、158名が認定されているとの回答がありました。この制度は、最初に香川県で実施され、四国キャラバンにおける香川県高教組の発言を受け、長年にわたって県や県教委に実施を求め、実現したものです。

高校進学・就職支援四国キャラバンの全行程に参加して

私は、他の3県の組合役員とともに四国キャラバンの全行程に参加しました。8月27日午前の香川からスタートして、午後に徳島、翌28日の午前に高知、午後に愛媛という行程でした。今年の大きなテーマの一つが奨学金返還助成制度や県独自の奨学金制度でした。徳島以外の3県での内容や様子を簡単に紹介します。◇香川県教育委員会との話し合いでは、奨学金返還助成制度を四国で最初に設けたことに感謝し、さらに推進していくこと要請しました。◇高知県では、センター試験で800点以上の成績であった生徒を対象にした、返還をしなくてよい奨学金制度を設けています。就職する生徒を対象にした就職定着セミナーを実施しているほか、労働者に関する法律を解説したリーフレットを高校3年生と大学4年生に配布しているなど、就職についてのサポートも工夫されていました。◇愛媛県教育委員会は、奨学金返還は学生支援機構の問題であり、その助成はしないという立場でした。



(高校ブロック・K)

障害児学校の設置基準策定を求める署名368筆に

「一番困っている現場の声を集めよう！」そう思って、教職員の会・特別支援教育ブロックの名で県下の特別支援教育諸学校に署名用紙を送付し、運動に協力を求めるようになって3年目となります。今年は、これまでに(9月27日現在)、8校から368筆分の返送が有り、署名数も過去最高となりました。

児童・生徒の急増による教育条件の悪化は県内でも深刻です。プレイルームやリズム室などの特別教室が普通教室として使われている、オープンスペースを2分割して普通教室にしているといった状況がずっと続いています。300筆を超える署名が寄せられるようになってきたのは、毎年取り組むことで、「定着」=会の活動に対する信頼が高まったことが考えられますが、それ以上にこうした切実な現場の声を反映したものといえます。

少子化で子どもが減り、地域では、学校の統廃合がすすむなかで特別支援学校だけは児童生徒数が増えています。深刻でアンバランスなこの現象はどうして起こるのか…。学力主義や管理教育、結果を重視する今の学校現場で、繊細で傷つきやすく人一倍ゆったりした人間関係を求める子どもたちが、学校のなかに自分の「居場所」を見つけることが難しくなっていると思えてなりません。子どもの権利条約(日本の批准1994年)や障害者権利条約(同2014年)の理念から言っても、日本の子どもたちは、もっともっと大事にされるべきです。

(特別支援教育ブロック・H)